

令和4年11月28日
農推第1210-8号

病害虫発生・防除情報メールサービス

大阪府環境農林水産部農政室

病害虫の越冬量を低下させ、来春以降の発生抑制につなげましょう。

特に注意！（12月）

水稲：ジャンボタニシ



注) 本写真は、農林水産省リーフレット「ジャンボタニシによる水稲の被害を防ぐために」より引用。

特徴

- ◆ 成貝の殻高は2～7cm程度。

防除のポイント

- ◆ 刈り取り後、耕うんして貝をひき潰したり、地表で寒気にさらし凍死させて、越冬貝を減らす。土中の浅いところ（6cm未満）に潜って越冬することが多いため、耕うんを浅くする。その際、トラクターの走行速度を遅く、ロータリーの回転を速くする。
- ◆ 耕うん機等の土に貝が付着することがあるので、ほ場間を移動する際はしっかり土を落とす。
- ◆ 本貝には人体に有害な寄生虫（広東住血線虫）がいる場合があるため、ゴム手袋やゴミ拾い用トング等を使用し、素手では扱わないようにする。もし、素手で触った場合には、石けんで手をよく洗う。

カラー技術資料「ジャンボタニシ（スクミリンゴガイ）から稲を守りましょう！」
についてもご参照ください。

<http://www.jpnn.ne.jp/osaka/color/tanishi/tanishi2017.pdf>

バラ科果樹類：
クビアカツヤカミキリ

防除のポイント

- ◆ 被害が大きい樹は伐採し、破碎（チップの厚さは10mm以下を目安）や焼却することが望ましい。
- ◆ 伐採した枝や幹はほ場に放置せず処分する。すぐに処分できない場合は、ネットやビニルシート等で2重に覆う。
- ◆ 幼虫は根部も加害するため、伐採後の切り株もネットやビニルシート等で2重に覆い、内部の幼虫の羽化後の分散を防ぐ。
- ◆ 本種は特定外来生物に指定されており、伐採後の残渣処理についても注意すること（本文1ページ参照）。

次回の情報は12月下旬にお知らせします。

◎「防除指針」<http://www.jpnn.ne.jp/osaka/shishin/shishin.html>

※農薬を使用する際には、必ず農薬のラベルを確認してください。

水稻（越冬対策）

縞葉枯病（ヒメトビウンカ）



縞葉枯病
(ひこばえでの病徴)

特徴

- ◆ 縞葉枯病は、ヒメトビウンカにより媒介されるウイルス病である。
- ◆ 発病したひこばえをヒメトビウンカが吸汁して、保毒する。

防除のポイント

- ◆ ウイルスに感染したひこばえは、本病の伝染源となる恐れがあるので、早めに刈り株をすきこみ、ひこばえを処分する。
- ◆ 冬～春期に畦畔の雑草を刈り取り、ヒメトビウンカの越冬密度を下げる。

バラ科果樹（もも、すもも、うめ等のサクラ属）

クビアカツヤカミキリ

伐採後の切株について



処分に伴う運搬について

- ◆ 本種は特定外来生物に指定されており、伐採樹であっても、内部に幼虫が潜んでいる場合は運搬が制限される。このため、処分のための運搬であっても市町村の指示に従うこと。
- ◆ 市町村焼却施設（もしくは市町村の清掃工場）で焼却可能な場合は、ネットで被覆する等の分散防止措置を実施の上、現地より運搬して焼却する。

野焼きについて

- ◆ 廃棄物の処理と清掃に関する法律第16条の2により、野焼きは原則として禁止されている。
- ◆ 一方で施行令第14条第4項において、「農業を営むためにやむを得ないものとして行われる廃棄物の焼却」については例外とされている。
- ◆ 例外に該当するかどうかは市町村によって異なるため必ず確認し、なるべく焼却施設にて焼却する。

●詳細は、技術資料「クビアカツヤカミキリの生態と防除対策」を参照
http://www.jppn.ne.jp/osaka/color/Aromia_bungii/kubiaka2112V2.pdf

温州みかん

ミカンハダニ（越冬卵含む）



ミカンハダニによる葉の被害※

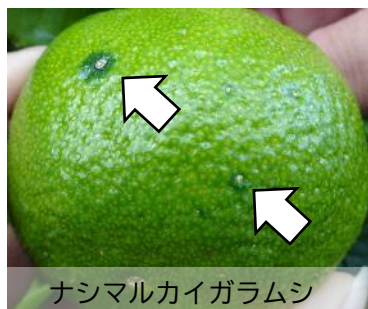
特徴

- ◆ 果実や葉に寄生し、吸汁する。吸われた部分は、色が抜けて白くなる。
- ◆ 日当たり、風通しの悪い密植園や枝葉の混みあったところで多発する。
- ◆ 冬期は低温のため、増殖は抑えられるが生息はしている。春になり暖かくなると、増殖を開始する。

防除のポイント

- ◆ 収穫後の園では、マシン油乳剤（機械油乳剤95（ハダニ類の越冬卵）、ハーベストオイル、スプレーオイル）等による防除を行う。
- ◆ 樹勢が弱っている場合は、冬期のマシン油乳剤で薬害（落葉助長）が生じやすいので、3月中～下旬に成分97%製剤のマシン油乳剤（ハーベストオイル等）を散布する。

カイガラムシ類



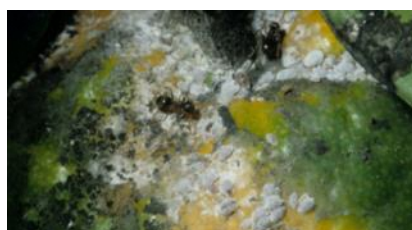
ナシマルカイガラムシ

特徴

- ◆ 葉や枝、果実に寄生し、多発した場合は、樹勢が落ち、果実の商品価値を低下させる。

防除のポイント

- ◆ 収穫後の園では、マシン油乳剤（機械油乳剤95（ヤノネカイガラムシ、その他のカイガラムシ）、ハーベストオイル、スプレーオイル（ヤノネカイガラムシ、その他のカイガラムシ類）等）による防除を行う。
- ◆ 樹勢が弱っている場合は、冬期のマシン油乳剤で薬害（落葉助長）が生じやすいので、3月中～下旬に成分97%製剤のマシン油乳剤（ハーベストオイル等）を散布する。
- ◆ 樹幹や枝に寄生することが多いので、葉や果実だけでなく、これらの部分にも十分薬液がかかるように散布する。



フジコナカイガラムシ※

貯蔵病害



緑かび病

特徴

- ◆ 青かび病、緑かび病、軸腐病等がある。
- ◆ 青かび病や緑かび病は主に傷口から感染する。

防除のポイント

- ◆ 収穫前にトップジンM水和剤（青かび病、緑かび病、軸腐病）、ベフラン液剤25（青かび病、緑かび病）等を散布する。
- ◆ 果実が濡れている時は収穫しない。また、収穫時、果実に傷をつけないように注意する。
- ◆ 貯蔵を始める前に果皮を乾燥させる（予措）ことで貯蔵後の腐敗が少なくなる。
- ◆ 貯蔵時の庫内温度は5℃前後、湿度は80～90%にする。

●病害虫防除グループホームページ「防除指針」を参照してください。
(<http://www.jppn.ne.jp/osaka/>)

●農薬を使用する際は、登録内容を確認してください。

ぶどう（越冬対策）

カイガラムシ類



クワコナカイガラムシ*

特徴

- ◆ ぶどうでは、フジコナカイガラムシやクワコナカイガラムシ等が加害する。
- ◆ フジコナカイガラムシは幼虫、クワコナカイガラムシは卵のうで越冬する。

防除のポイント

- ◆ 越冬期に粗皮削りを行い、越冬密度を下げる。

もも（越冬対策）

カイガラムシ類



ウメシロカイガラムシ*

特徴

- ◆ ももでは、ウメシロカイガラムシとクワシロカイガラムシ（白色～灰白色）、ナシマルカイガラムシ（黒色～茶褐色）等が加害する。
- ◆ 越冬期には、ウメシロカイガラムシやクワシロカイガラムシは成虫が、ナシマルカイガラムシは幼虫が、枝に寄生している。

防除のポイント

- ◆ マシン油乳剤（機械油乳剤95（カイガラムシ）、トモノールS、スプレーオイル等）による防除が遅くなると薬害の危険性があるので、2月上旬までに行なう。
- ◆ マシン油乳剤を散布した後は、石灰硫黄合剤の付着が悪いので、少なくとも1ヶ月の間隔をおいて散布する。

トマト・ミニトマト（施設栽培）

すすかび病・葉かび病



被害葉 表（左）

裏（右）※

特徴

- ◆ 日照不足で樹勢が落ちると発生しやすい。
- ◆ すすかび病は近年増加傾向にある。葉かび病より、葉裏のかびが黒く見えるが、肉眼で見分けることは困難である。葉かび病抵抗性品種で症状が見られる場合は、すすかび病を疑う。

防除のポイント

- ◆ 多発時すると防除が困難であるため、予防的散布が重要である。
- ◆ 発生が見込まれる時期に、ベルコートフロアブル、ダコニール1000等を散布する。発生を認めたら、トリフミン水和剤、ファンタジスタ顆粒水和剤、ニマイバー水和剤等を散布する。

灰色かび病



被害葉

被害果

特徴

- ◆ 施設栽培で発生が多い。20℃程度の多湿時に発生が多く、花がらや果実のがくから発生することで、果実にも被害が生じる。

防除のポイント

- ◆ 発生が見込まれる時期に、ベルコートフロアブル、ダコニール1000等を散布する。発生を認めたら、ファンタジスタ顆粒水和剤、ロブラール水和剤等を散布する。

きゅうり（施設抑制栽培）

黄化えそ病

ミナミキイロアザミウマと
キュウリ黄化えそ病被害葉※

特徴

- ◆ キュウリ黄化えそ病は、メロン黄化えそウイルス（MYSV）によるウイルス病であり、キュウリ、メロン、スイカ、シロウリ、ニガウリ等に感染する。
- ◆ MYSVに感染すると、葉にえそ斑点を伴うモザイク症状や黄化等の症状を示す。
- ◆ MYSVは、ミナミキイロアザミウマによって媒介される。

防除のポイント

- ◆ MYSVを媒介するミナミキイロアザミウマの防除を徹底する。
- ◆ 発病株は取り除き、完全に枯死させてから適切に処分する。
- ◆ 栽培終了後は、全株を地際から切断または抜根し、施設内を除草したのち、2週間以上密閉して、ミナミキイロアザミウマを餓死させる。

退緑黄化病

タバココナジラミと
キュウリ退緑黄化病被害葉※

特徴

- ◆ キュウリ退緑黄化病は、ウリ類退緑黄化ウイルス（CCYV）によるウイルス病であり、キュウリ、メロン、スイカ等に感染する。
- ◆ CCYVに感染すると、葉に退緑小斑点を生じ、次第に小斑点が増加・癒合しながら徐々に黄化する。
- ◆ CCYVは、タバココナジラミによって媒介される。

防除のポイント

- ◆ CCYVを媒介するタバココナジラミの防除を徹底する。
- ◆ 発病株は取り除き、完全に枯死させてから適切に処分する。
- ◆ 栽培終了後は、全株を地際から切断または抜根し、施設内を除草したのち、2週間以上密閉して、タバココナジラミを餓死させる。

キュウリ黄化えそ病とキュウリ退緑黄化病について

- ◆ 近年多発しているキュウリ黄化えそ病とキュウリ退緑黄化病は、症状で見分けることは困難である。
- ◆ ミナミキイロアザミウマ、タバココナジラミを施設外へ拡散させないため、栽培終了後は必ず施設を閉め切る。なお、両害虫を餓死させるために、施設内の餌を残さないよう閉め切り前の除草を徹底する。

●病害虫防除グループホームページ「防除指針」を参照してください。
(<http://www.jppn.ne.jp/osaka/>)

●農薬を使用する際は、登録内容を確認してください。

あぶらな科野菜（キャベツ、こまつな、しろな等）

根こぶ病



キャベツのしおれ症状と生育不良*

特徴

- ◆ 定植後1ヶ月頃から晴天の日中に葉がしおれるようになり、やがて葉色・生育が悪くなり、激しい場合には枯死する。

防除のポイント

- ◆ 発病した株は、根ごとほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ 収穫作業は未発生ほ場より行ない、汚染圃場を拡大しない。汚染ほ場の作業後は機器、履き物を洗浄する。

菌核病



キャベツでの発病

特徴

- ◆ 暖冬時に発生が多い。

防除のポイント

- ◆ 黒いネズミの糞のような菌核が土中に残って伝染源になるので、発病株は取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ 発生が予想される場合は、結球開始期からベンレート水和剤（キャベツ、はくさい）、ロブラール水和剤（キャベツ、はくさい）等を予防的に散布する。

たまねぎ

べと病



べと病（苗における発病）*

特徴

- ◆ 育苗時や定植後に、被害残さ等から感染し、越年罹病株として1～2月に病徴を現し、周辺への伝染源になる。越年罹病株は、葉色は光沢のない淡黄緑色で、生育も劣る。

防除のポイント

- ◆ 越年罹病株は取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ ジマンダイセン／ペンコゼブ水和剤、ダコニール1000、ランマンフロアブル等を予防的に散布する。